

苫東プロジェクトとハスカップ保全

～ハスカップのサンクチュアリとイニシアチブをめぐって～

2012/12/09

NPO 法人苫東環境コモンズ

事務局 草 苺 健



1 . はじめに

このレポートは、平成 22 年（2010 年）2 月 24 日の夕方、苫小牧ハスカップ研究会の求めに応じ、苫小牧東部開発(株)が昭和 50 年前後からどのようにハスカップ¹の保全と移植に取り組み、かつ地域資源活用とブランド化に取り組んできたかを関係者に説明するために作った、自らの資料を元にしたものである。極めて残念なことに、苫東破綻の整理のさなか、ハスカップに関して進められてきた調査研究と移植保全、そしてそれらの経過を示すすべての資料は失われてしまって今は見るべきものがなにもなくなり痕跡すらないのは残念を通り越して無念である。地域のハスカップへの本格的で継続的な取り組みだけだただけになおさらだが、翻れば、関係者のハスカップへの関心の乏しさを如実に示すものともいえる。あるいはハスカップこそは、勇払原野の夏の風物詩という時代の寵児のような名声と、開発の壁になる問題児との間を行ったりきたりしてきたシンボルでもあったと言える。ハスカップには親身になってくれる本当の後見人が今、いないのではないか。

さて、2 年前の研究会当日は、簡単なレジメを元にして、植生調査、アセス、移植、地域分譲、栽培研究、パッケージとラベルデザインのそれぞれに直接関与した筆者草苺²が、約一時間ほど講演した。当時を知る研究者も、研究成果も不在になりつつある現在、経過を正確にとどめておく必要もあると考え、概数を用いることをお許しいただきながら、講演内容を思い出しつつ、このときお話しした内容に周辺エピソードも新たに足して、活字にしておくことにした。

¹ ハスカップ；この呼び名で呼ぶ漿果樹には、和名のクロミノウグイスカグラとケヨノミがあり、それを総称している。以下、ハスカップという。

² 草苺；草苺健。北大農学部を卒業後、昭和 51 年苫東(株)に入社、苫小牧事業本部環境部に勤務し、鑑賞緑地造成のための植栽試験、環境調査などに従事。いすゞ自動車用地の開発に伴う環境アセスメントに基づき、ハスカップの樹木実態調査、移植保存、地域保存から子会社のハスカップ事業を支援して地域ブランドづくりに参画。平成 10 年に退職後は、ボランティアとして雑木林の保育を継続し、平成 22 年 1 月に N P O を設立して継続。

2. 旧苫東会社のハスカップ対応と保全策

ハスカップ原野は燃える

やや思い出話から始めると、わたしが大学を卒業して一年間研究生として過ごしている間に、指導してくれていたM教授が、「君にぴったりの就職だ」と紹介されたのが、苫東工業基地の緩衝緑地づくりという仕事だった。造林学を学び、山登りのクラブ活動を続け、卒業論文では、冬の道内の山々を跋涉した経験から天然林の形を森林美学の観点からモデルを示したことが、M教授をして「ぴったり」と言わせたかと思う。そうして極度の就職難の世相を受けて右も左もわからないまま務めた苫小牧だった。当然ながらというべきか、個人的にはハスカップのことは全く知らなかった。苫小牧といえば、高校2年の3月、1年後は北海道大学を受験しようと、ヒッチハイクで札幌へ下見に行く途路の3日目の朝、トラックに下されたのが何となく今の日本軽金属前の広い通りだった。そこで乗り継いで札幌に向かった記憶がある。それが初めての苫小牧、勇払原野だった。

さらに、北大苫小牧演習林での学生実習でも苫小牧に来たが、演習林にほぼ缶詰だった。そして研究生としてI先生の調査の助手として阿寒湖に向かう際に通ったのが、風景としてみる初めての勇払原野だった。当時は造林学でしばしば対象にする樹木ですら名前がおぼつかなかったから、ヨシの原野にバランスよく散生する樹木がわからなかった。

「先生、あのカッコイイ樹木はなんですか？」

「ヤチハン。ヤチハンノキ³だよ。」

これがハスカップとの唯一のニアミスだった。

苫小牧東部開発(株)に入社してからは、土地勘をつけるために時間を見つけては平らな原野のようなフィールドを歩き来したが、昭和51年の入社その年の7月頃、社内無線で「山火事発生、消火準備態勢に入るように」という連絡が来た。そのころまで、ハスカップという地域独特の漿果樹があることは知っていたが、市民とのかかわりは実感がなかった。原野に自生するハスカップの実を採りにきた市民が投げ捨てるタバコの火で、原野の湿原が燃えるらしい。これはとても不思議であった。

数年たってから実験してみた。なぜ土がモグサのように燃えるのか。理由は簡単だった。泥炭がむき出しになっているのである。湿原の「かなっけ」に赤く染まってむき出しの粉のようなもの、あれは泥炭だったのだ。赤い泥炭の上に火のついたタバコを載せて団扇で扇ぐと、モグサのように火がつくのである。なぜ、これが繰り返すのか。その応えも簡単で、市民が、モグサのような泥炭がむき出しになっていることを知らないのである。消防の防火協議でこのことを指摘したが、消防はなんだかんだ言ってこのキャンペーンのアイデアをまともに受けなかった。いったん火事になればモグサ状だから1週間もいぶり続け、あるとき風でも起きれば再び炎を上げる。毎年のように繰り返す山火事で、まさか土地所有者として放置もできず、職員は他の仕事をなげうって、この原野火災とつきあわざるを

³ ヤチハンノキ；湿原に生息する中低木。勇払原野では樹高5mほどになる。ヨシ湿原が乾燥してくると出てくる。ハスカップの群落も放置すると、土壌が乾燥した結果、ヤチハンノキ-ホザキシモツケ群落などに変わる。現在のハスカップ採取地もいずれヤチハンノキ林に遷移する可能性が大で、すでにそれは始まっている。ハスカップはそのままでは消滅する。

得なかった。水の入ったジェットシューターを背負い、くたくたの消火も実はあまり効果はなく、最も威力のあるのは、火の気のありそうな場所の周囲をブルドーザーでわさわさと乱暴にただ地はぎするのである。根本的な消火方法はこれしかなかった。だから山火事の跡地は荒れた原野がさらに荒地のように見えた。航空写真で見れば、苫東には楕円形の400mトラックのようなものが見えたものだが、それはすべて消火跡地である。

移植のはじまりは地域資源活用と「ミチゲーション」

さて、この勇払原野の風物詩であるハスカップはなぜ移植や栽培がなされるようになったのか。理由は、ふたつある。一つは、ハスカップという地域特有のベリーが工業基地に大量にあることは、関連子会社（苫小牧興発）の業務として地域貢献できると判断した当時の苫小牧事業本部長（道庁出身のA氏）が、苫東会社の植樹会の付帯工事として、昭和48年頃から毎年500～700本のハスカップを計画的に移植保存してきたのである。これらはつた森山林内と周辺の空地に年度を分けて移植され、管理されてきた。これらはやがて、後述するハスカップジャムとハスカップワイン、それとお菓子の原料として販売ルートにのって、勇払原野（苫東）固有の地域資源を活用した産品として小さなビジネスになった。

ハスカップが移植されるようになったもう一つの理由は、苫東D地区へのいすゞ自動車の向上進出と開発行為だった。ハスカップは、環境庁（当時）の「貴重植物」に指定されており、工業用地を造成するために手続き上必要な環境アセスメントを行う際に、貴重植物の「保全の措置」を明記しなければいけないのが発端になる。自生地が極めて限られるハスカップの宿命であろうが、この保全措置としては、

自生地の保全

苫東基地内の移植保存

自生する自治体および隣接する自治体への移植

・住民への分譲

・企業、学校、団体への分譲

全道の農協への分譲

があり、環境アセスメントを所管する道庁の担当部局とはこの方法で保全措置として見なすという了解を得た。ちなみに、ハスカップは立地が偏っているため、苫東の保全緑地の湿原では十分に担保できないので、苫東の公園緑地予定地への移植、苫東基地では移植しきれない分を「里子」に出すものである。最近の言葉で言えばミチゲーション（影響の緩和策）である。ミチゲーション⁴には回避、縮小、回復・再生・修復、軽減、代替などの方法がある。保全緑地は影響を回避して永久に残そうとするものであり、苫東基地は地域内の再生に相当する。苫東基地はさらに広域の栽培という形態での保全にあたる。

ハスカップの移植は、昭和48年に始まった苫東株の植樹会の付帯事業として、毎年約500～700本程度が、つた森山林とその周辺に移植され、将来的には子会社のハスカ

⁴ ミチゲーション：開発を行う場合、環境への影響を最小限に抑えるために、代替となる処置を行うこと。回避、最小化、修正、軽減、代替の5つの原則があるとされる。

ップ事業に供されることとなった。ハスカップ事業は後述するように、ジャムおよびワイン原料として加工を行い子会社が販売したもので、このほかケーキ等の原料として生で札幌千秋庵などに販売された。

移植が大々的なプロジェクトになった最大の契機は、いすゞ自動車の苫東立地である。D地区という自動車関連用地 150ha ほどの用地分譲にあたって、苫東では、現在の高規格道路の北側のE地区で、湿地を埋め立てる土砂を採りながらD地区に運び、切り盛りによって同時に二つの地区の開発行為を完了させるのが特徴である。ハスカップの多くは、D地区に多かった。多いとは言ってもそれは太古からの湿原や原野ばかりではなく、苫東プロジェクトが始まる以前に、すでに宅地開発されたところをもっとも多かった。実際に、分譲が行われて、ハスカップが自生していた原野は、排水路と道路で格子状に区画があり、宅地ごとに番号や購入者の名前の書かれたプレートも埋められていたのである。

ハスカップの実態調査

苫東の「10年のあゆみ」の年表によると、いすゞ自動車の立地に伴うD地区第1次開発事業の工事アセスメントの確定告示は56年2月なので、環境アセスメントは55年に作成と協議を終えていたはずだから、あらかじめ実施したハスカップ自生地箇所と本数を調べた実態調査は54年頃に行われたと記憶する。アセスの措置としての移植は55年10月に開始した。

筆者は環境アセスメントに自然環境部門で関与し、このハスカップの樹木実態調査では設計から現地の施工管理、そして基地内への8000本移植、最後は市民や団体への分譲、全道の農協への分譲に携わった。この調査では、D・E地区で約15万本のハスカップが分布していることが判明し、いすゞ自動車の開発予定地だけでも約10万本が自生していることがわかった。市内の造園業者に発注したこの調査は、まさに人海戦術でカウントしたもので、カウントされたものはナンバリングされた。30cm前後の小さな個体は成木移植としては適さないことからナンバリングされていないものも多く見られたことから、実数は15万本よりさらに多かったものと考えた方が実情にあっていると思う。会社はハスカップを8,000本、同時に貴重植物になっていたエゾイソツツジ1,000本も同時期に移植し、移植地はつたもり山林の西側平坦地(天皇の植樹会の北隣)であった。

苫東会社の「10年の歩み」では第3章の基盤整備等の「8.その他」でこの一連のいきさつが簡単に次のように記述されている。

「当基地内の各所に群生するハスカップは、スイカズラ科の落葉低木で、全道各地と本州の一部に分布するが、なかでも勇払原野とその周辺が最大であり、苫小牧、千歳などの住民にとって「ハスカップ摘み」と称する黒紫色の果実採取が初夏を飾る風物詩となっている。46年には苫小牧郷土文化研究会が苫小牧市及び市議会にハスカップの保護を要望しており、これを受けて苫小牧市は、小・中学校、公園等にハスカップ移植をはじめ、ハスカップ園の建設を行うなどハスカップの保護に努めてきた。

当社は植樹会の付帯工事として48年以降55年まで、継続的に工業用地予定地から緑地内へのハスカップ移植を実施してきたが、D地区の用地造成工事にあたり、工事に先立って希望者に分譲配付の案内をしたところ、申込みが全道各地から殺到し、

その数は1市3町の住民より1,127件、各種団体から42件、地域外から192件に及んだ。

当社は55年秋にハスカップ8,000本(ほかにイソツツジ1,000本)を蔦森山林に移植するとともに、同時に希望者に分譲配付を行ってD地区内の約37,000本のハスカップを整理した。」

里子に出したハスカップ

ハスカップは、このように昭和50年代の半ば、いすゞ自動車の立地を機に保全と移植が盛んに行われた。基地内の移植はそれなりに可能な限り行われたが、残りは、基地外の二ーズに沿って「里子」に出された。内訳の資料はすでに紛失してしまって正確な数字は不明だが、大雑把な記憶では、市民に2万本、農協に5万本、そのほか、苫小牧市内の企業や学校などにも100本から数百本前後ずつ数千本近く、恐らく1万本が分譲されることになり、ブロックと掘り取り日を指定し現地での分譲に立ち会った。

市民分譲への対応は慌しかったが、もっとも量の多いのが全道の農協関係で、地元の苫小牧、厚真、千歳などはもちろん、美唄市、大樹町、中富良野町、道東の標津、道北の士別からの応募もあったと記憶している。折からの減反政策の減反跡地に栽培するもので、果実の売り上げと減反補助の両面でプラスだったようだ。農協を通じて農家が栽培したハスカップは、肥培管理がなされ、実が大きく酸味がなく甘かった。

特に印象に残ったのは幌延町の男能富(だんのっぶ)小学校からのリクエストだった。当時の事業本部長だったAさんの口利きで送ることになったのだが、北海道新聞がハスカップ移植事業のシンボルとして取材することになり、約100本近くをコンパクトに積んだバンは留萌で一泊したあと、北上して無事小学生たちの待つ男能富小で引渡しと植え付けを済ませたことを当時の北海道新聞は全道版で報道した。程なくして小学生からお礼の手紙が届いた。

また、市内では元代議士Nさんが庭にハスカップを植えたいという話が人づてに聞こえて、届けることになった。ハスカップはイチイやツツジなどと違って、美を競う園芸の上では評価は特にない。むしろ、立派な庭なら隅のほうに藪のように植えることの方が多いが、予想通り、N氏の庭はハスカップのような無役の灌木が入り込むようなものではなかった。庭の入り口には富士山の石だと言う大きな岩が苔むしてガンと居座って芝もある和風庭園だった。N氏に事情を話すと、ま、そうだな、ということでどこか端っこに仮植えしておいとしました。

3. 苫小牧興発(株)の取り組み

ストック全容

今になって考えてみると、ハスカップは上述したように「地域資源活用」というオーソドックスなプロジェクトをベースに、「土地造成に伴う保全」の行為が重なって、あるいは織り込まれるようにして一つの時代を作ってきたように見えてくる。そして今、新たに保全の課題が出てきているが、これは最後に、NPO苫東環境コモンズが静かに取り組んでいるテーマとして展望を述べることにしたい。

そのうえで苫小牧興発という、苫東開発(株)の子会社(以下、興発)の取り組みを思い出しながら概要をまとめてみたい。興発は、親会社の植樹会に併せて直営の作業員が数百本のハスカップ移植をいすゞ自動車の立地が決まるずっと前から、D地区内から先行して移植を行っていたことは繰り返し述べたとおりである。本当の目的は、当時の本部長に直接伺ったことはないが、保全と地域資源利用ではなかったかと思う。興発は、実際、ハスカップを原料とした想定できるあらゆるものにチャレンジした。当時は生食も市場に出回っており、生食の出荷も行っていたが、これは保存が難しく担当者は苦慮していた。ふたつめはハスカップのジャムである。みつめはハスカップのワイン、さらに挿し木により苗作りをして、小さなポットに入れたハスカップの苗も小規模ながら販売した。筆者はそのいずれにも親会社のスタッフとして協力するよう命があり、積極的に応援した。

今になって思えば、ハスカップのプロジェクトは、勇払原野の地域資源・ハスカップを素材にして文字通りの勇払ブランドに挑戦していたことになる。これらは、当時のA事業本部長のトップダウンで行われており、札幌千秋庵や小樽ワインの社長と本部長のつながりに負っていた。ハスカップのプロジェクトが念のいったものだったと言えるのは、商標登録などのために国税局のOBの方もプロジェクトに関わっていたことでもわかる。商標登録はしかし全くうまくは進まなかったが、それというのはある会社がハスカップという名の付くありとあらゆるものが登録済みであり、ハスカップのジャム、ワインとも「ハスカップ」というキーワードが使えず、結局、「勇払原野といえばハスカップ」という因果関係にすぎなくて「勇払ジャム」「勇払ワイン」という商品名になったのである。

一方、生食用の出荷は加工用として千秋庵がメインだったと記憶しているが、千秋庵は、勇払原野産にこだわりご指名だった。なぜかというと、パティシエがよその産地、たとえば美唄や千歳など肥培管理された実ではハスカップ独特の酸味がないというのである。霧が多く低温の勇払原野ではどうしても糖度があがらず甘み以外の食味が目立ってしまうらしい。選抜されていくと恐らく粒が大きく、甘く、苦みの少ないものに収束していくのだろう。味はなにも甘いだけがいいとは限らず、そんな評価も事実あったのである。

そんな評判にわたしたちはなにか大事な部分をほめられたようで誇らしかったが、ただ糖度が低いと言うことには思わぬ落とし穴があった。ワインを醸造するにあたって勇払原野産のハスカップがもつ糖度の低さではアルコール発酵をしないことがわかったのである。小樽ワインではそのためなにか糖度を増す工夫をして醸造したはずだ。

このようにして地域ブランドの一角を示したかのように見えたハスカップ商品は、苫東視察のゲスト用などに親会社に買い取られたり関係者の購入に支えられて10年近く続いたような気がする。しかし、ハスカップの採集から加工まですべて人力に頼ったハスカップジャムは本体業務との関わりのなかで次第に重荷になり撤退することになったのだと思う。また、このような製品開発とマーケットに直結した商いは、かなり強いリーダーシップと思いがけないと継続できないのも世の常であり、A本部長というカリスマ性のあるリーダーが現場を離れた当時としては、それもいたしかたない流れだっただろう。

ハスカップに関する研究

大群落を敷地内に擁し、地域資源を地域ブランドまで高めようという意気の長い取り組みが、苫東会社のもとで子会社・興発が中心になって進んでいったが、移植地をベースにジ

ラムやワインを商品化し、挿し木苗も作り始めて一部は販売ルートにもものったことは以上に述べたとおりであるが、興発はこれらにあわせてハスカップに特化した総合的な研究を、王子製紙林木育種研究所の千葉茂所長にお願いした。記憶をたどると、特に栽培に関するものに重点を置いてはいるものの、ハスカップのいろいろなことが何もわかってはいない、そんな状態だったので、基本的なことから始められた。例えば、ハスカップの実の形状と食味、実の重量と形状、果実一個あたりの種子数、種子の発芽、挿し木苗の作り方、発根の土壌条件別差異などなどのほか、育種研究所らしく、遺伝子に関する調査も行われた。

B4版横のペーパーに青焼きされた手書きレポートは、研究所には何回かお邪魔して千葉所長や担当の永田さん、飯塚さんに直接内容を伺った。たしか4年かそれ以上続いた研究で、原野の植生や苦東の緑化の植栽試験ですでお世話になっていた関係で、話は苦東の植生だけに限らずさまざまなジャンルに及んで非常に有意義な勉強をさせていただいた。栗山育種研究所の手法は、手仕事でいろいろな実験器具を作ったり、まめに試験区を作って統計的な差を分析したりと、丁寧さに目を見張ったものだが、場合わけする際の視点も新鮮だった。例えば実生苗を作るに当たって、数種類の土壌を用いて種を蒔いたもの、実を埋めたものなどさまざまに条件を代えて結果を見るのだが、その中に、ただ指で押し埋めたものというのがあった。自然条件に近い物理的な播種状態に当たる。

平成10年代の半ば、NPOをつくる際の柱のひとつはハスカップだと考えていたわたしは、ハスカップのこの研究を思い出して、活字にしておこうと考え、苦東新会社へ照会し、何度か、旧会社に自分が残した資料を探させてもらった。ホコリっぽいプレハブの2階に数回お邪魔したが、冒頭で書いたように、結局、見つからなかった。興発の関係者も不明、一昨年(平成22年)の往時の担当者であった永田さんと偶然札幌でお会いして、消息を聞いたが、研究所の閉鎖の際にすべてが運び出されて行方不明、飯塚さんも研究所に保管したままだったから、持ち合わせはなかった。ハスカップに関する実態調査の資料も同じである。経営破たん(ドサクサ)で捨てられてしまったらしいが、うらめしいこと限りない。

ハスカップジャムのラベル



ほんの少しだけ絵心があったらしいわたしは、A本部長から、子会社の苦小牧興発のハスカップジャム事業を応援するように言われていた関係で、ジャムのラベルの試作を繰り返

返した。その基になるハスカップの構図を得るために、早朝や霧の日など、美しい画像が得られそうな日を選んでハスカップの原野に赴き、実にたくさんの画像を納めた。山関係の先輩で苫小牧でDPEの仕事をしていたカメラマン中村千尋氏にもお願いしているいろいろな構図を収集した。そのなかから、もっともハスカップがハスカップらしく見え、物語性も匂う構図というものを探っていった。実はそれまで、ハスカップの図案化は、三つ星さんのものもさほど見るべきものがなく、もちろん典型的な図案はなかった。

そうこうしているうちに、簡単な図案に仕立てられるということがわかってきた。上のパッケージなどがそうである。このそれらしさは、葉が対生で、腋から4つの実が出て時々3つになったり2つになったりするというハスカップの特徴をつかんだ上で描きあがないとデフォルメもできないのである。そこによやくたどり着いて、もっともハスカップらしいものができあがった。残念ながらそのうちで最も秀逸なバージョンが今手元にはなく、さらに困ったことに、著作権もなあなあで済ましており、子会社は消滅してしまった。

ただ、変なところに、なごりが残っている。一つは苫東の看板。看板の端っこにハスカップの絵が描かれている。これはわたしのカットであるが、看板屋さんが写し取ったものであろう。ひどいのは、市内の緑道の車止めに使われているカット。これは完全に盗作というか、著作権侵害で、犯罪である。



豊川の緑道のカットと看板に挿入された図。いずれも作者にことわりはなし。

また、市内のあるお菓子メーカーは、わたしが一番上の、パノラマのハスカップをデザイン化したとき、数ヶ月後に同じような色合いとデザインのパッケージでハスカップジャム商品を出した。わたしは、ああ、真似されたと、内心嬉しかったが本当は別の対応もあったはずだ。さらにそのころ、JR苫小牧駅の構内に葉っぱが2枚、実が二つのハスカップのデザインが壁画的なカットとして何枚か描かれるようになり今も残っている。これもわたしは見覚えのある構図である。恐らく、わたしが苫小牧興発のジャムで作り出していたハスカップの図案は、別のクリエイターやジャム関係者に、図案のさらなる図案化のヒントを提供したのではないかと密かに考えている。

4. ハスカップのエピソード

ハスカップは虫媒花なのか

また、おもしろいエピソードがあったのは、その残渣である。ワインを絞ったかすは皮と

タネである。そのハスカップの実本体には、たしか数十個のタネがあり、ワインの残渣は何十万、何百万という種子の塊であるはずだった。これを思いついて2年目頃から引き取ることにした。一旦水にとかし、皮とタネに分離してタネだけを取り出し培土に播いてみると、80%近い発芽率だった。また、水に溶かさないうまま培土に埋めても発芽した。しかし、翌々年だったかは全く発芽しなかった。これは何を意味するのか。普通に考えれば、受粉していないからだと言える。あるときは高い確率で受粉し、あるときはそうでないという落差が当たり前なのかはわからなかった。

そもそもハスカップは虫媒花なのか、風媒花なのか、それがどうもよくわからない。昼日中、昆虫が花卉に潜っているのをほとんど見たことがなかったからだ。たまにマルハナバチが潜って花卉を八つ裂きをしているのを見ることがあったがせいぜいその程度だった。昆虫に詳しいある方に聞くと、それは夜間に蛾が媒介しているかもしれない、というので開花時期、夜のハスカップ畑で観察してみたが蛾らしいものは発見できなかった。結局、わたしには不明のままだ。

いすゞとハスカップの因縁

ハスカップの最も大きな群生地は苦東計画のD地区に当たる。いすゞ自動車が進出したのは、このD地区が自動車関連用地に位置づけられていたからである。たとえばトヨタ自動車でも日産でも可能性はあったのだから、いすゞとD地区に特に因縁めいたものはない。しかし、あのとき妙なことに気がつき、わたしはやはり因縁があるのではないかと思うようになった。それは立地したいすゞは「ジェミニ」という小型のセダンを量産始めたのである。ジェミニは日本語では双子座という星座名である。一方、ハスカップはしばしば、あるいはほとんどの場合、葉っぱの付け根（葉腋）に双子のような実をつけるのである。「ふたつ」にまつわるのはそればかりでなく、一つの実を横断すればわかるが、1個の実



は実際はふたつの実がくっついてできているのである。属名のヒョウタンボク属というのもそこから来ている。ハスカップのそばでよく見かけるベニバナヒョウタンボクもそうだが、1個の実ひょうたんのようにつたつが合体している。簡単に言うと、葉の付け根には2個ずつの花が片側1, 2対（つまり2個~4個）ついて、結果的には図のように、実が片側1個か2個になる。1個が落ちて見た目では3個と言うことも多い。花の咲く時期から実がなるまで観察していると、この意味はよくわかる。

双子のような花と実、そこにジェミニを生産する工場が建った。わたしは密かにこの巡り合わせに有頂天になって、いすゞ苦小牧工場を「ハスカップ工場」と呼んだらどうかと関係者に提言したものの、全くそのような動きにはならなかった。

いまわの際に望まれたハスカップの塩漬け

エピソードのようなものを書き始めるといろいろなことが思い出されてくる。食味で思

い出したのは、まず天皇陛下である。昭和天皇は、昭和 40 年代だったと思われるが、王子製紙の栗山の研究所を訪問されたとき、時の千葉茂所長はデザートに夕張メロンとハスカップを出されたという。昭和天皇は迷わずハスカップ（たしか砂糖をかけたものと記憶する）を所望されたという。これは千葉所長に後日談として伺ったことである。

食味のもう一つは、ハスカップの塩漬けである。これは上厚真の S さん宅でいただいたのが最初だった。地元の方にはとりわけ風土色の豊かな食べ物といえ、おにぎりに入れたりするから、梅のない勇払原野あたりでは梅干しの代用としていたようだ。日の丸弁当の真ん中に入れるとまさに梅干しのそれと見分けが付かないが、酸味が強いのかアルマイトの弁当のふたが溶けるのだ、と S さんは言っていた。また、知人のおばあさんが亡くなる前、家族がおばあさんになにか食べたいものがないか聞くと、「ハスカップの塩漬けが欲しい」というので用意して与えたら、さも満足したようににこやかな顔をしてやがて息を引き取ったという。風味なのか土着性なのか。ひょっとすると胆振の勇払原野の開拓などに関わった人々にとって、ハスカップの塩漬けはソルフードなのではなかったのかとも想像した。

この頃になって筆者も塩漬けやしそ漬けを漬けるようになった。そこでわかったことだが、ハスカップは口の中をリフレッシュさせるときには格好の逸材だと言うことである。下の上へのせ、かんでみるとシュワーっと広がる独特の酸味、苦み、渋み、それらが口中の不快感を一掃してくれるのである。人生の最後において、ハスカップの塩漬けを食べたいとリクエストしたおばあさんの本心は、あるいは闘病で大分不具合を来したかもしれない口中を、勇払の風のように拭き清めたかったのではないか。

湿原のスピリチャリティ

ハスカップの塩漬けがソルフードではないか、と思ったことを書いたついでにもうひとつ不思議な体験を書いておきたい。恐らく昭和年代の後半、わたしはいすゞ自動車の土地造成に伴う環境アセスメントの追跡調査をしていたころである。調査の要点は開発によるいすゞ南側の湿原の環境変化を調べるもので、いすゞ自動車の工場南側の道路用地からほぼ直角に 1500m ほどのラインを海に向かってはり、その両側に出現する種を記録して経年の植生変化をみていくものだった。土地造成を始めた頃から、数年、毎年一回、C 地区と呼ばれていた湿原に単身入り込んで数日、びっしりと種を野帳に書き込み、わからない種は袋につめて持ち帰って調べた。

そうしたある日、ヨシ・イワノガリヤス群落の真っ只中でたっていると、そこを吹きぬける風がリコーダーのように感じられた時だった。この今いる湿原とそれを取り巻く植生、柏原という原野、それらに土地の神々の気配がしたのである。樽前山神社は山と森と原野の神々を祀っているものと聞くが、その中の森と原野の身近な神々ということになるのだろう、確かに土地には神がついていて土地と一帯になっている感覚だった。氏神さまである。別の表現で産土（うぶすな）と呼ぶものだ。

どうしてそのような感覚になったのか。自然の畏れの湿原版というところだろうか、わたしには初めての感覚だった。山々や森林や海に感じた自然とひとり向き合ったときの敬虔で崇高な祈りのようなあるもの。それをわたしは初めて湿原に感じ取った。数千年数万年前は海だったという一帯の地質年代を思い起こしながら、開拓に入った人たちの労苦を

愚んだ。

わたしは今、人間の最高の幸福は何かときかれたら、土地とのつながり、と応えたい。土地の産土に守られているという感覚を覚えると、人は自分が今息づき愛着をもって暮らしているその土地と自分がつながっていると感じることで「ひとり」になり、本当の自分を知るのである。

5.まとめ ~ハスカップの後見人とサンクチュアリ~

NPO設立時の事業の一つにハスカップ保全をすえてから、地元の方々の動きを含めたハスカップを取り巻く現状を観察、勘案してわかってきたことは、ハスカップには現状と将来を的確に捉え対策や展望を語れる後見人がいない、ということである。頭のどこかにハスカップというボキャブラリーを持っているレベルから、乾燥化して勇払原野から姿を消すかもしれないと言う郷土としての危機感を持っている人が少ないということ。それはもし、たまさか熱い思いをもった市民がいたとしても、市民としては危機状況をなにかで発信する以外どうすることもできないという面もある。

一部では東日本大震災のがれき受け入れに反対する理由として、市民の口に入るハスカップが被爆するという点に着目して運動として進めていく案や、世界でも希少なハスカップ原種と自生地を保存する、付加価値の高い運動を展開しようとする案もお聞きした。NPO 苫東環境コモンズは、いち早くハスカップサンクチュアリの考え方を事業計画の中に謳っており、いささかも悲しい感触も含めてサンクチュアリ（聖域）に仕立てたいと考えている。とりあえず、運動論や保全計画論議の渦中にさらさないで、勇払原野の風土と産土（うぶすな）に思いをはせる「よすが」とだけしておこう、という控えめな枠組みである。

そんな思いから、サンクチュアリの第一歩を現況把握と記録保存の準備に当てたい。そのことは最終的に、ハスカップ後見人の名乗りを自らあげることになってしまうかもしれない。後見人はハスカップの身内であって、ハスカップを何かに利用する側ではない。勇払原野で生まれ、育っていくうちに原野が生産する老廃物が積もって乾燥化していき、自分の生息域が狭まっていくのが生物世界の自然である。ハスカップはやや悲しい運命に身を任せながら、新しい生命の場を地域の人々にゆだねる。滅びるのもよし、湿地の片隅で細々と生き延びるのもよし、もちろん、ハスカップ移植地で更新のプールが引き継がれることを大きな前提としてである。

NPOにとってのハスカップはそんな関係でありたい。不動産業としては原野はお金に替わるフローであるけれども、不動産業の旧苫東という会社は、地域開発というミッションの延長で、郷土種ハスカップを保存し、保全し、地域ブランドの守り手、まさに後見人であった。世間の多くの市民は、メディアがかつて言っていた「大企業優先」で「公害垂れ流し」という開発が、実は総合的な地域開発で地域経済を現実的に発展させる起爆剤になってきたことを認めようという兆しは感じることはあっても、歴然とした合意ではないと思う。かつての旧苫東こそ、本当のハスカップの後見人だったと言うべきであろう。同じミッションを持った法人は消滅したことから、一旦「ハスカップの後見人不在」は始まったのであるが、新会社がそのあとを引き継いでくれるものと思う。後見人で有り続けることは社会貢献CSRであり、基をさらにたどれば、公的な性格を持った法人がこの土地

を包括的に所有したことによってはじめて、ハスカップを市民が自由に採取できる「コモンズ」の産物となり得たのであり、新しい後見人を応援するものの一つとしてNPOが生まれたと言ってよいかもしれない。

一方、社会活動をする方から見れば、ハスカップは知床運動における「シマフクロウ」かもしれないが、NPO 苫東環境コモンズにとっては、ハスカップは当初からコモンズのシンボルであった。この稿も、その経緯を振り返り自ら立ち位置を再確認するために書き始めたものである。さしあたって、1970年台のハスカップの現状については数々の自然環境調査で明らかにされており、昨今は遊水池の計画の検討資料としてハスカップの分布について、かなり専門的に調査されているように聞いている。この間の、40年間の調査のほとんどは前述の通り、ほとんど失われたが、これは潔くあきらめて、これからのハスカップのことを考えていこう。その際、自然度の高い勇払原野の新しい保全と利活用のわくぐみをハスカップ・イニシアチブと呼びたいと思う。

(おわり)